

あらわれた。また農民編著の耕作記もあつた。年代と耕作の進歩状況について述べる。

本研究における資料は杏雨書屋と田口慶昭氏から与えられた古文書の複写である。古文書の解説は瀬戸市村田秀雄先生の御指導によつた。以上に対して厚く御礼申し上げます。

(新潟薬科大学名誉教授)

『福田方』の小児諸病證論 について

広 田 曄 子

『福田方』は壺隱庵有隣によつて貞治二年(一三六三)頃に著わされた医学全書である。『医心方』、『万安方』に比べると非常に短い書物であるが、室町時代の代表的医学全書として重要な位置を占めている。

演者は日本の小児科領域の歴史について調べてきたので、ここでも『福田方』の小児諸病証論をとりあげてその歴史的位置づけを行いたい。なお、『福田方』は日本古典全集本を用いた。

『福田方』はかなまじり文で書かれているのが大きな特徴といえる。それより前に著わされた『医心方』、『万安方』は漢文である。『頓医抄』はかなまじり文なので、これに次ぐものといえる。

『医心方』や『万安方』のようにほとんどの文の出典が

明記されているわけではない。

目次には、小兒変蒸、色脈、驚風論、驚證と傷寒の差異、潮熱、發熱、指南、糞色、斑瘡胞瘡論治、黒壓、胞瘡論、疹痘差別、外色、瘡出遅速、剝去、小兒撮口、好啼治方、膚黒治方、魘病治方、小兒不行治方、小兒不語、解頤、鬼舐、臍湿、滯頤、小兒病名、とある。これらは『医心方』や『万安方』に比べると、数の上でも非常に少ない。小兒科領域を網羅しているとは言いがたい。しかも変蒸、魘病、解頤といった、時を経るにつれて認められなくなる病名がみられる。『福田方』では、まだ前代の疾病概念をそのまま受け継ぐ傾向がみられる。

しかし一方、目次の数が少ないにもかかわらず、驚風、發熱、斑瘡、撮口、小兒不行、小兒不語などといった、小兒科領域では重要と思われる疾病をとりあげている。

目次の数も少ないが、内容も短く、特に述べたいところだけを記しているようにみえる。薬物による治療法も全部で二十二しかないが、このことは実用書的傾向が強いためと考えることもできる。

内容について

項目別に病気の原因、症状、鑑別診断、治療法、予後などについて述べている。必ずしもこれらすべてについて記されているわけではなく、中には治法のみ記載されている項目もある。また、私云、として著者有隣が鑑別診断や治療法などについて述べていることは、経験の深さを伺わせるものである。

項目別にその内容をみると、まず変蒸については、古来の説を簡潔にわかりやすく述べ、変蒸の熱と傷寒の熱との鑑別について記されている。

脈についても、速さについてだけ簡潔に述べている。小兒の年齢によって脈拍数を述べていて非常に実用的である。

驚風論では慢驚と急驚の二つに大別しており、『万安方』にみられるような複雑な分類はしていない。

小兒の病症として最もよくみられる發熱についてはかなり詳しい記載がなされている。驚と熱との関係についても述べられており、急驚を熱性痙攣や髄膜炎のような發熱性のものと考えていたように思える。また、私云、として小兒の潮熱には積聚の薬を与えよ、と処方を受け、その加減法まで記してある。

瘡疹については比較的多くのページを費している。治療には升麻の入った処方を用いられているが、升麻は江戸時代に至るまで瘡疹に対して用いられている。

撮口については、予後不良を的確に指摘しているが、予防法までは書かれていない。ただ、臍湿の項に、小児の臍は湿つて時に爛れるが早く治療しないと臍風瘡となる旨が書かれている。

処方について

二十二処方中の十一処方は単方であり、それ以外のものも構成生薬の数は少ない。外用も七処方もある。猫の糞といった汚物を用いた処方もあり、『医心方』小児門にみられるように入手しやすい物を用いて治療しようとする姿勢もみられる。

小柴胡湯といった『傷寒論』に記載されている処方も載っている。小児の腫の力が強く、熱のある時に用いるように、と非常に直感的な記載がなされている。また、大黄についても、胃腸を洗い濯ぐ作用があるとしている。

以上のように『福田方』小児諸病證論は簡略に書かれ、実用を目的としていると考えられる。『医心方』にみられ

る実用性や簡潔性がみられると共に、『万安方』にみられる処方運用の際の経験の深さも伺える。簡潔性という、後の日本の医書にみられる傾向が最も顕著であるという点で『福田方』は極めて日本的である。また、病名や原因についての新しい考えはみられないが、処方の運用といった実際面では非常に独創的であるという点でも日本的であるといえる。

(杉並区)